

科目名	こども音楽療育概論				
担当者氏名	児玉 達郎				
授業方法	講義	単位・必選	2・選択必修	開講年次・開講期	4年・秋期
ディプロマポリシーに基づいて重点的に身につける能力	○ 専門応用-4 発達の深い理解 ◎ 専門応用-5 指導・保育の専門性				

《授業の概要》

音楽療育の意義と援助方法を学び、療育的な音楽活動の中で、障がいのある子どもの発達能力を出来るだけ有効に育てあげ、自立に向かって育成するために、音楽の持つ様々な働きをどのように活用していくべきか、基礎・専門知識を学習する。音楽療育に必要な曲の選び方・曲の作り方（簡易な作曲編曲）を学習し、実際の療育的な音楽活動の様々なモデルについて学習する。

《授業の到達目標》

- ・障がいのある子どもの音楽療育で必要となる基礎・専門知識を説明できるようになる。
- ・能動的音楽療育における作曲の理論を学び、編曲ができるようになる。
- ・受動的音楽療育で使用する曲を、子どもの状態に応じて選曲できるようになる。

《成績評価の方法》

平常点 30%
 期末試験（筆記試験） 70%

《テキスト》

二俣泉・鈴木涼子・作田亮一 2011 「音楽で育てよう 子どものコミュニケーション・スキル」春秋社

《参考図書》

参考書：適宜紹介する。
 資料：必要に応じて配布する。

《授業時間外学習》

音楽療育に関するプリントと、曲の作り方に関するプリントを、授業で配布するので、その復習をする。授業で紹介する音楽（受動的音楽療法で使用する曲）を鑑賞する。

《備考（教員経験の有無）》

《授業計画》

週	テーマ	学習内容
1	音楽療育についてのオリエンテーション	音楽療法とは何か。音楽療育で使用される用語。能動的音楽療法と受動的音楽療法。音楽活動の分類。音楽療法と音楽療法以外の音楽活動の違いについて。
2	音楽の心理的作用 同質の原理	音楽の持つ心理的な働き（気分の転導、感情の誘発、発散、励まし、慰め）。「同質の原理」と受動的音楽療法における選曲の考え方。
3	音楽の生理的作用 音楽の社会的作用	音楽の持つ生理的な働き。音楽の持つ社会的な働き。音楽の持つその他の機能、音楽と身体運動の関係。
4	コミュニケーションの育ちと音楽1	音楽はなぜ子どもを動かすか（発達障がいの子どもが見せる、音楽への反応）。能動的音楽療法のためのモチーフの「原型」を使った旋律の作曲方法（1）を学習。
5	受動的音楽療法で使用する音楽の選び方1	受動的音楽療法で使用される機会の多いクラシック音楽。西洋音楽史の大きな流れ（古代から近現代まで）。
6	受動的音楽療法で使用する音楽の選び方2	受動的音楽療法のための楽曲分析の方法。
7	コミュニケーションの育ちと音楽2	コミュニケーションを育てるための音楽の活用について。能動的音楽療法のためのモチーフの「原型」を使った旋律の作曲方法（2）を学習。
8	発達障がいと音楽療法	発達障がいと音楽療法について。能動的音楽療法のためのモチーフの「反行形」を使った旋律の作曲方法（1）を学習。
9	音楽療育の計画手順1	アセスメント（対象児の実態把握）、目標設定、セッションの形の検討について。
10	音楽療育の計画手順2	プログラム内容の検討、音楽療育の実施、観察・記録、評価について。能動的音楽療法のためのモチーフの「反行形」を使った旋律の作曲方法（2）を学習。
11	コミュニケーションを育てる音楽療法1	コミュニケーション行動が育つのに必要な基礎能力「気づく」「眼差しの共有」について。三項関係について。
12	コミュニケーションを育てる音楽療法2	コミュニケーション行動が育つのに必要な基礎能力「要求」について。音楽療育における作曲法「モチーフを用いたメロディのアレンジ方法」を学習。
13	コミュニケーションを育てる音楽療法3	コミュニケーション行動が育つのに必要な基礎能力「みわける・ききわける」について。音楽療育における作曲法「刺繍音によるメロディのアレンジ方法」を学習。
14	コミュニケーションを育てる音楽療法4	コミュニケーション行動が育つのに必要な基礎能力「動作模倣・音声模倣」について。個々の子どもに合わせて活動を考える。問題行動への対処について。
15	音楽療育のまとめ	音楽療育における能動的音楽療法と受動的音楽療法。音楽の持つ働き。発達障がい児のコミュニケーション能力を育てる音楽療育について。